

# 乙女騎士団が隊の存続のために 枕営業するようです

酒井仁  
挿絵/かん奈

立ち読み版





# 登場人物紹介

## ファイア ティファアインスマン



名門貴族の娘にして

天馬騎士団のリーダー。

思い立ったらまっすぐ突き進む性格。

### FIRE

## ミサカ

麻島ウルツクス



### ICE

天馬騎士団の副リーダー。

見た目は凛々しく理知的だが、

腹黒い一面も。

## シャルロット

アンバーニール

天馬騎士団の最年少メンバー。

子供っぽい見た目通り、

無邪気で天真爛漫。



### THUNDER



色欲にまみれてはいてもそこは大臣、ティファの目論見などどうにお見通しのようだ。もとより、腹芸や駆け引きなど自分には向いていないのだと、認めざるを得ない。

「ええ……仰る通りですわ。わたくしとて貴族の端くれ。部屋が狭い、給金が低いなどという瑣末なことに不満を感じているわけではありません」

ですが、とティファは真剣な眼差しで大臣を見返す。

「わたくしにとつて天馬騎士団は生き甲斐……わたくしがわたくしであり続けられる大切な場所なのです。わたくし自身と、そして友のためにも、騎士団だけは守り通したい……そのためならばどのような苦勞も厭いません」

「おお、なんとという立派な志こころざしだろう。私とて、王国の誇り、シンボルであるペガサスナイトをないがしろにするつもりは毛頭ありません」

「では——」

しかし、中年太りの大臣はにんまりと品のない笑みを浮かべ、金髪美少女の前に仁王立ちになる。

「私は王国の財政を担当しております。いわば騎士団が存続するもしないも、私の胸三寸というわけです」

「……………なにを仰りたいのですか」

「つまり、キミの期待に添うからには、私にも何か見返りがないと割に合わぬ、というこ

とですよ」

そう言うとは好色な中年男はでっぷりと肥えた腹を少女の前に突き出してみせる。

だが、彼が何を要求しているのかわからず、ティファは困惑する。大臣が無垢なる乙女に見せたがっているのはその太鼓腹ではなく、その下にある奇怪な膨らみであるということに気付くまで、しばらくかかった。

「ブランバーグ……い、いったいそこに何を隠しておられるのですか」

大臣の肥満した腹部の下では、股間部分もっこりと盛り上がっている。てつきりそこに何かを隠し持っているのかと勘違いする少女騎士の目の前で、大臣はむひひと笑って「ずるり」と下履きごとズボンを引き下げた。

「ふえっ……?」

それは、肥満腹に負けることなく意外な長さでティファを真正面から見据えていた。

(な、な、なんですのあれは? あんなに反り返って、先っぽがあんなに赤黒くテカテカして……金属? 武器の類?)

だが鈍器というには少々短すぎる。せいぜい、両手で握れば全体が隠れてしまうほどの長さだが、ティファはまだそれが身体の一部であることに思い至らない。

「こ、この鈍器でわたくしに何をしろと……ひゃあっ?」

恐る恐る手を伸ばした指の先で、それは「びくんっ」と跳ね上がった。

さらにその根元あたりに黒々と縮れた毛が生えていることに気付き、少女はようやくそれが大臣の身体の一部らしいということを知った。

「これはまさか、大臣の身体の一部……は、腫れものなのですか」

「むひひひつ、ペガサスナイトのお嬢さんは、男のマラをご覧になったことがないと見える。まあ確かに、腫れていると言えそうですが、怖がることはない、御手自ら握ってくれませんか」

「こ、これを握るのですか……まあ、ずいぶん熱を持ってらっしゃいます。患部は冷やした方がよろしいのでは？」

「いえいえ、むしろ摩擦することで腫れが引くというものでしてな。さあ、もつと強く握って下さい」

言われるままに、ティファは金髪をくゆらせて指をその不気味に赤黒い肉の棒に絡めてみる。「ぴく、ぴく」と震えるさまが気持ち悪く、なにやら異臭が漂ってくるが、大臣の顔は愉悅にやにさがっているので、そのまま続行する。

（摩擦……ということとは、しごけばいいのかしら？ それにしても、殿方の身体にはなんと奇妙なものが付属しているのね）

ペガサスナイトは伝統的に女性のみで構成される。これまで式典や軍事演習に参加することはあっても、男ばかりの兵士に交じって行動することなどなかった。

ましてや、男性の裸体を目にするような機会など。

「大臣、こ、これでよろしいのですか？ 一向に腫れが引かないようなのですけれど」

「よろしいですよろしいです、できればこう、リズムをつけて一定の速度で上下にしごいて頂ければ……おほうっ、手のひらが吸いついてくるようですよ」

大臣は太鼓腹を揺らし、化け狸か何かのように悶えてみせる。

その光景は恐ろしく滑稽にティファの目には映ったが、大臣はティファに酌をされている時よりもずっと嬉しそうだ。

（こんなおかしなことで満足してもらえぬなら……リズムをつけて、一定の速度で……）

うんしようんしょと金髪の騎士は真剣な表情で、スケベ親父の陰茎を両手でしごき続ける。酒で身体が火照っているせいか、大臣の加齢臭に混じって、なんとも言えない不快な臭気が股間のあたりから立ち上ってくる。

（匂いがきつくなってきた……それに、先端からぬるぬるした液体が滲んできたわ）

男性の股間の突起物から滲んだ透明な汁が、乙女の指にまとわりつく。

その感触は決して心地よくはないが、そのぬるぬるが潤滑油となつて、しごく手の動きをさらにスムーズにする。もしかするとこれは腫れが引く前兆なのかもしれないとティファは考え、しごく速度を少しだけ速める。

「おうっ、おふおおっ。よ、よいですぞ、その調子……ああ、ペガサスナイトの指が、

私のナニを……ああ、たまらんっ」

大臣の声はますます上ずり、膝ががくがくと震え始める。

立ち上る体臭はいっそうきつく、刺激臭が目染み入ってくるようだ。だが摩擦の効果は目覚ましい効果を發揮しているようで、大臣は込み上げる快感に視線を泳がせながら、口の端からは涎を垂らし、よがっている。

（これが、大臣の言う見返りになるのかしら？ 腫れて膨張した身体の一部を摩擦する、これは一種のマッサージ……確かに、マッサージは心地よいものだけれど）

「ほおおっ、ほっ、ほあああっっ！ も、もう少し……もう少し……あ、ああっ」

大臣は感極まったのか、自らかくかくと腰を前後に振り立て始めた。

赤黒い幹部はティファの手からすっぽ抜けそうになり、慌ててそれに取りすがろうと前のめりになると、すぐ目の前にあの不気味な物体の先端が接近する。

（ううっ、なんて生臭くておかしな匂い……!）

につちゆにつちゆ、ずりゆっ、ずりゆりゆっ。

透明なぬるぬるはさつきより量を増し、大臣が腰を振るたびに肉の棒は少女の手の中で勢いよく跳ね上がる。

その激しいピストンにティファはついていくだけで精いっぱい、これで大臣が満足しているかどうかともよくわからないまま、肉棒を握り続けていると、まったくなんの前触れも



なく中年男の動きが止まった。

「ふごおおっ！」

「えっ、どうされ……きやああああっっ」

どびゅっ、びゆるっ、びゆるるるる……っつっつ。

手の中で勢いよく跳ね上がると同時に、先端の開いた穴から白い膿のようなものが大量に噴き出したのだ。

「ふごっ、ふほ、ほおおお………」

豚のようなうめき声を上げながら、大臣は白い膿を患部から吐き出し続ける。

あまりに大量に噴きこぼれたそれはティファアの指の間から垂れ落ち、絨毯に汚い染みを作る。こぼれ落ちた膿からは、股間の匂いにも勝るとも劣らぬ、奇妙な匂いが立ち上って、ティファアは眉根をひそめる。

（こんなに膿が溜まっていたのね……やはり大臣は何かの持病があるのでしょうか。明日にでも適切な治療を受けて頂かなくては）

そつと肉棒に絡めていた指を放すと、大臣はがくりとその場に膝をつき、肩を落とした。その顔はまだ夢うつつ状態のようで、「うひひ……」と低く笑っているのが不気味だ。

それにしても、とティファアは指にべつとりとついた膿に驚きを隠せない。膿というのは通常、傷口が再生される過程で細菌が死滅した残滓だと聞いたことがある。こんなに大量

の膿が出ることで自体が不自然だし、第一、膿を放出して気持ちよくなるなんて、聞いたことがない。

(それとも……これは膿ではないの？ でも患部の腫れは引いているようだよ)

反り返っていた大臣の股間のモノは、萎れて小さくなっている。

ティファが手拭いで指を拭き清めていると、放心していたはずの大臣が、突然がばりと抱きついてきて、ティファは大臣ごとクツションに倒れ込んでしまう。

「ふひ、ふひひひっ」

「ど、どうされたのです、ブランバーク大臣？」

しかし、大臣は正気を失ったような血走った眼で、ティファの胸元に顔をうずめてきた。さつき、衣服の上から捏ね回された乳首がツキンと疼く。

「はあ、はっ、はあああ……ま、まだだ、まだこれからだよ……ふひひひ」

さしものペガサスナイトといえど、でっぷり肥満した中年男にのしかかられては、押しつけることもできない。大臣は両手で乙女の胸の膨らみを寄せ、乳の谷間に舌を潜り込ませる。

れるっ、れろれる……ちゅ、ちゅばっ。

「ひゃ、く、くすぐったいです、ちよ、やめ……っ」

スケベ親父に乳をねぶられているというのに、ティファはなぜか身体の奥が火照るのを

感じていた。あの白い膿の生臭い匂いが鼻孔をくすぐり、その奇妙な匂いが不思議な興奮を少女騎士に与えていた。

(わたくし、なんだか変ですわ。あの膿の匂いを嗅いでいると、頭がぼうつとして……)

自分の身に生じた変化を理解できぬまま、ティファは大臣の手で胸をはだけられてしまふ。ふるんと弾力のある白い肉球が二つこぼれ出ると、大臣の両手に肉球を掴み上げられ、指の付け根ではピンク色の突起物を挟み込まれてる。

「おおお、なんと可憐な乳房……ニップルがコリコリ充血してたまらぬっ」

膨らみの谷間に顔をうずめ、無我夢中で擦りつけてくる大臣の愛撫には、もはや老獪なテクニクなどはない。

手コキによって火の点いた中年男の欲望のままに、乙女の膨らみを辱め、我がものとすることしか考えられないのだ。そんな大臣の豹変ぶりとストレートにぶつけられる男の欲望に、少女騎士の胸はなぜか高鳴る。

(こ、この男は、あんなに夢中でわたくしのおっぱいを……ああ、どうして。胸がドキドキして止まらないっ)

大臣の奇妙な振る舞いが、男の肉欲であることにティファもようやく気付きかけていた。だが、自分が一人の魅力的な女であるときみなさされている現実には、頭がついていかない。大の大人が赤子のように乳首に吸いつき、桃色の突起物を舌で転がしている光景に困惑す

るばかりだ。

（大臣は妻子もいらつしやつたと思うけれど、わたくしとこんなことをするのはあまりよろしくないのでは……いえ、おっぱいを揉まれるくらいなら、スキンシップの一環とみなされるのかしら？）

いまだ男を知らぬ純潔の騎士は、男女の交合のやり方はおろか、不倫だの浮気だのということにも明るくない。

それでも、自分の身体が男の愛撫によって変調をきたしていることは理解できる。

「ブ、ブランバーク大臣？ ああ、さっきあれだけ膿を出したのですから、も、もうこれ以上は」

「こ、これだけの美乳を前に、一発ごときで満足できるほど私は淡白な男では……むはっ、こ、この立派な乳で、ぐ、愚息を……はあはあ」

「ひいっ？ な、なぜ、また元の大きさに……っ!!」

ティファが驚くのも道理。

先刻、あれだけ大量の白い膿を放出したばかりだというのに、大臣の股間のモノはすっかり大きさを取り戻し、びくんびくんと臍に届かんばかりに膨張していたのだ。

無論、それはティファが思っているような「患部の腫れ」でもなんでもなく、性的興奮によって海綿体が充血した勃起状態であることは言うまでもない。

「な、何をなさるのですか、大臣ッ」

でっぷり肥った色欲中年はふうふうと荒く息をつきながら、どすりとティファアの上に腰を落とした。

体格差、体重差でこれでは身動き一つできない。完全に無防備になった少女騎士の腹の上に陣取ると、大臣は太鼓腹を揺らしながら股間のイチモツをティファアの巨乳の谷間にぽすりと挟み込んだ。

「おほおおお、なんとという弾力、なんとすべすべとした肌だ。ペガサスナイトの乳に私のちんぽが飲み込まれている！」

(ち、ちん……なに?)

大臣がどこちなく腰を揺すると、肉球の間で陰茎が擦られる。

根元までたっぷりとまぶされた精液のぬめりが抽送を助け、にちゅにちゅと真っ白な肉球の谷間を赤黒い肉棒が激しく出入りする。

「むはっ、ふははっ、なんとという快感、なんとという刺激的な光景……ティ、ティファア殿の乳の間から、亀頭が突き出ておるわ！」

「えっ、きゃああつ」

ふと胸元を見たティファアの目が丸くなる。

大臣が腰を突き出すたびに、白い肉球の谷間から赤さびた金属のような先端部が突き出

て、今にも少女の唇に触れそうなのだ。手でしごくくらいは許容できても、あんな異様なものに唇で触れるのはまっぴらごめん、と少女騎士は懸命にもがくが、あかくほどに亀頭がいよいよ接近してくる。

「ほ、ほれ、これも騎士団存続のためですぞ。我がマラにご奉仕して下さい」

「そっ、そうでしたわ。これも騎士団存続のため、あなたのこれに奉仕をすればわたくしたちの力になって下さるのですね、大臣？」

懸命に訴える騎士団のリーダーに、浅ましい中年男は涎を垂れ流しつつがくがくと人形のように頷いてみせる。

「ほひひっ、おひいっ。ま、ま、任せておきたまへひひっ。だ、だから、キミのお乳とお口で、わたひのマラを、マラをおっ」

「んんっ、ん、あ、ぶう……っ」

中年男の分厚い手が美しい金髪を掴み、ティファの顔を下に向けさせる。

その状況でうんと下腹部を突き出すと、「ぬるりっ」と先端部は美少女の唇に吸い込まれてしまった。

(なにこれ、しょっぱい……？ これ、やっぱり膿じゃないわ。むしろ体液？ 生臭くて、しょっぱくて……頭がくらくらする！)

茎の中にわずかに残っていた精液が乳圧で押し出され、ティファの口の中に牡の味を広

げていく。

それが子種を含んだ男の精液であるという認識こそなかったが、ティファは女の本能で自分が大臣の肉欲に晒され、辱められているということを察知した。だが、と同時に彼が強くこの行為を求めていること、この「ご奉仕」がティファの要望に沿う結果を出すものに違いないとも思った。

(彼はこの体液でわたくしの乳房と口を辱めることで、満足感を得ようとしているということね。や、やむを得ないわ。ここは大臣を満足させなくては)

騎士団はティファ一人で存続させることはできない。団を支える人々の助けがないと成り立たないのだと改めて思う。

それに……自分でも信じられないことだが、最初は吐き気さえ覚えた男の茎と体液の味は、今はそれほど不快でもなくなっていた。多少の屈辱感はあるものの、女として自分が求められていることに、なにかしら熱いものを感じるのだ。

(騎士としてではなく、女として……? よくわからないけれど、わたくしはわたくしにできることをなすだけ!)

「おほううつ? てい、ティファ殿から舌を絡めて……むほおおお、たまらんっ」

ティファは自ら肉球を下から持ち上げるように、陰茎を挟み、乳肉で上下にしごき立てる。肉の合わせ目から突き出てくる先端部に首をもたげて吸いつき、じつとりと滲んでく

る白濁液を舌ですくい、ねぶり取る。

しゅっ、しゅっ、れる、むちゅっ、ちゅばっ。

パイズリフェラ、などという下世話な言葉を、名誉あるペガサスナイトたるティファが知っているはずもない。

だが、どんな状況においても常に最善の策を見つけ、果断に実行するという騎士の精神に従い、ティファ・T・ケインズマンは大臣の陰茎を乳と舌で責め立て、好色な中年男から快美の声を絞り取り続ける。

「ぬほっ、むほおおっっ！ 乳ま○こと口ま○こが同時にいいっ！ むひよ、ふひよおお  
お〜〜っっ」

悦楽に悶えよがる中年男の姿に、財務大臣などというお堅いイメージは欠片も残っていない。娘ほどの年齢の少女のパイズリとフェラチオの同時攻撃に翻弄され、本能の赴くままに快楽を貪り続ける。

（大臣ったら、涎を垂れ流して、本当に気持ちいいのね。わたくしの胸と口で、殿方をこんな喜びさせることができるなんて）

その事実は意外であると同時に、奇妙な興奮をティファにもたらす。

自分は今まで騎士としてひたすら実直に鍛錬を続けることこそが、より高みを目指す唯一の方法だと思い込んでいた。だが、騎士団としてそれを支える人々の力なくして騎士であ



り続けることはできないのだ。

(わたくしは、騎士であることにこだわりすぎていたのかもしれないわ)

その新たな可能性に胸の奥が熱くなる。

ティファはさらに舌を小刻みに動かし、先端部の周辺をなぞるように、あるいは頬をすぼめて吸引したりしてみる。

すると、最初に滲んできたあの透明な液体がじわりじわりと分泌され、乳の間で肉棒がびくびくと震えるのが感じられた。

「ふわああああ、もう駄目だ、そんな、いやらしい舌使いと、張りのある乳でしごかれたら……ひぎ、ふぎいいいい」

「だ、大臣っ。も、もつとご奉仕いたします、いたしますから、騎士団存続の件、今ここで誓約頂けますか？」

「ふひっ？ あ、ああ、構わん、騎士団の解散などありえんっ！ だ、だから、も、もう少しだから……ああああっっ」

美少女に責め立てられつつも、色欲に支配された大臣は腰の動きを止める気配もない。来るべきフィニッシュに向け、浅ましくピストンを繰り返す。

「おおお、出すぞ、その綺麗な顔にぶちまけてやるぞおっ」

(ぶ、ぶちまける？ もしかしてあの白いのをもう一度出すというの？ あの、熱くて生

臭くて……ドキドキするようなあれを……！)

男の股間から放たれる臭い体液を顔にぶちまけられる……騎士として、いや女としてもこれほどの屈辱はないだろう。

にもかかわらず、ティファの胸は激しく高鳴り、自分が醜い中年男を絶頂に導くこと自体に異様な興奮を禁じ得ない。

(く、来るなら来なさいっ！)

意を決して亀頭を咥え込んだ瞬間、先端部がティファの口の中で「ぶわっ」と膨張した。びくんびくんと大きく跳ね上がるそれは少女の口からすっぽ抜け、ぱくりと開いた鈴口から大量の白濁液が吐き出された。

「ふほおおおっ、おっ、お、おあああああつっつ」

「んぷっ……！ ふあ、ぷはっ」

びゆるるるるっつっ、びゅっ、びしゃっ、びちゃああつ。

放出は最初の一発目に勝るとも劣らぬ量で、それはすべてティファの整った美貌に降り注がれる。

粘っこい粘液に鼻孔を塞がれ、思わず口を開けて息をしようとする、白濁は美少女の口の中にも容赦なく流れ込んでくる。目を閉じた瞼も粘っこい汁で塞がれ、目をつぶっていてもびしゃびしゃと果てしなくあの臭い液体がぶちまけられているのを感じる。



「うお？ な。なんだこれ、タマからちんぽ汁が吸い取られるうううっ？」  
しゃぶつて一分と経たぬうちに、男は腰をがくがくと痙攣させ、シャルの口の中に精液を打ち放つていた。

吐き出した白濁をこくと飲み下すと、少女は勝利のVサイン。

「これぞシャルの新必殺技、『真空ちんぽ地獄』！ どんどん吸い取っちゃうぞおっつ」

一度に五人を相手に手コキを披露するティファと、強烈バキュームでザーメンを絞り取るシャルロットに男たちも興奮し、ドツと押し寄せる。

「必殺技つて……なんてネーミングよ、あの子たちは……」

ファンサーピスというよりイロモノ変態ショーという雰囲気、ミサカは呆れた目を向けるが、ティファたちはノリノリでファンの男たちを迎え撃つ。

そして、五十人は下らない性欲旺盛な男たちは、一時間と経たずに三人のアイドル騎士たちに精を絞り取られ、全員力尽きたのだった。

シルバーチケットを持ったファン、五十名以上を相手に、ザーメンまみれになる騎士団の少女たちを見た時、「彼」は正直失望していた。

熱気や体液の匂いまで匂つてきそうな光景を、彼らは別室から覗き見るような形で見物していた。もつとも「彼」以外の選ばれしゴールドチケットを持った人々は、妖しくも淫

らに悶える美少女たちに目を奪われていたのだが。

「むふふふ、予想はしていましたが、シルバーチケットではフェラチオやパイズリに手コキ止まり……」

「ということとは、我らの手にしたゴールドチケットではそれ以上のファンサービスが望めるということですか」

極小確率で音響盤に封入されていると言われる黄金のチケット……それを手にするには天文学的な幸運、もしくは同じ音響盤を何百枚、何千枚と買い占めることのできる好事家こうざかにしか無理な話。

ここにいる十数名の人間は、皆身なりもよくいかにも金持ちといった風情で他ならぬ「彼」も例外ではない。

その中でも彼はおそらく最高齢と思しき老人だったが、その巨軀から感じられる迫力はとても老人とは思えない。重ねてきた齡がそのまま胆力となつて老いた身体を支えているようだ。

その「彼」が他のファンたちと唯一違っているのは、天馬騎士団の少女たちを見る目に毛の先ほども欲情の色が浮かんでいないことだった。

（ふん——とんだ興醒めだ）

「あつ、お客さま？ ゴールドチケットをお持ちのお客さまのイベントはまだこれからな

のですが」

「下らん。あのような小娘どもに何かを期待したのが間違いだつたわ」

「お、お客さまうっ？」

慌てて引きとめようとすると係員には目もくれず、老人はイベント会場を後にしたのだつた。ほんのわずかにでも、名誉と伝統ある天馬騎士団が自分を楽しませてくれるのではないかという期待を持った自分を心の中で罵りながら。

彼——アレクサンドル・T・オーベルシュタインは、貴族の中でも最も古い家系に属する旧家の最後の当主であつた。

息子に娘、曾孫に玄孫まで血縁にはいるはずだが、古びた屋敷を訪れる者はもう久しくなかつた。彼の血縁に連なる人々はとうに彼を見捨て、朽ちるしかないこの屋敷に彼を置き去りにして去っていったのだ。

今は通いの使用人が最低限の身の回りの世話をしてくれるだけで、彼自身滅多に屋敷を出ることもなかつた。

(無駄な時間を過ごしたものだ。やはり出かけるのではなかつた)

一人グラスを傾けながら、老人は淀んだ居間の空気に身を沈め、暖炉の炎を無表情に見つめるばかり。無聊をかこつ暇つぶしにと、古書店から箱買いで古書を取り寄せた中に、

その映像盤はあった。

(なんだこれは)

それが映像や音楽を記録する円盤であると知ってからも、さして興味はそそられなかった。だが長年の習慣として目を通す国の公報誌に「彼女たち」はいた。

(天馬騎士団……あいどる、だと……?)

天馬騎士団のことは彼もよく知っている。

彼がまだ若々しく、野には魔物が跋扈ばうこしていた頃、人々を守り、邪を討滅する正義の乙女騎士団。しかし魔王と魔物がいなくなつてから、騎士団などとうに解散したものだとはかり思っていた。

(それが今はたつたの三人であいどる活動だと……それが騎士のすることか)

最初は、近ごろの腑抜けた若者の軟弱ぶりを嘆いてみせることで、自らの老いから目を逸らそうという姑息な考えもあった。

だが、映像盤の中の少女たちの生き生きと歌い踊る姿に、彼は圧倒された。

もとより歌舞音曲などという浮薄なものとは縁遠かった老人の目に、きらびやかなステージで汗の珠を飛ばし、満面の笑みで観客の声援に応える乙女たちの姿は神々しくさえ映った。

(だが——だからこそ)

年甲斐もなく音響盤を大量に買い漁った。

握手会にのこのこ出向いて老醜を晒すのは気おくれしたが、いざゴールドチケットを手に入れた時、老人は長らく引き籠もっていた屋敷から出る決断をしたのだ。

そして——彼は裏切られた、と感じた。

(大枚をはたいて音響盤を買い占められる者だけがあのよう破廉恥なサービスを受けることができる。それではただ単に単価の高い客だけを特別扱いしているだけ。つまるところ街の娼婦と変わらぬではないか)

確かに騎士団の少女たちは若く、美しく、魅力的だ。

だが、若い頃から放蕩者として浮名を流してきた老人にとつて、多くのファンに媚び、ザーマンを浴びて笑みを振りまく騎士団の少女たちは不快だった。

それはまるで、彼自らが歩んできた自堕落で放埒な日々、肥大した自尊心ゆえに家族にも心を開くことができず、血縁にすら見放されそれによしとしてきた彼の人生と重なるような気がしたのだった。

「あんなところになど、行くのではなかった……」

ごくりとグラスを呷ると、老人は胸に顔をうずめるように安楽椅子に身を沈めた。

と——。

甘く心地のよい、茴香ういきょうの香りがする。



さりと絹が擦れる音、そして人の気配がいくつか。

「む……使用人はどうに帰宅したはずだが」

老人の耳に届くノックの音。

「むう」と呻きとも返事ともつかぬ声を漏らすと、彼以外誰もいないはずの古い邸宅に、突如賑やかな音楽が流れ始めた。

「む、何事だ……!?!」

ちゃんちゃらら〜っ、ぱーぱぱっ、ぱーっ、じゃっじゃ〜ん!

「こ、この曲はPGS3のテーマソング、『永遠のペガサスナイト』!」

聞き間違えるはずがない、ライブでは必ず歌われるPGS3の代表的なナンバーだ。

ばあん! と重々しい檜造りの扉が勢いよく開け放たれる。その向こうで小型投光器に照らされた少女たちは、老人の目の前で軽やかにステップを踏み始める。

「……お、お前たちは……」

「PGS3、特別出張サービスですわ〜っ」

豪華な金髪を揺らすのは、PGS3のリーダー、ティファ。

その背後から現れたのは黒髪ポニーテールも美しい神秘的な美少女と、ふわふわ茶髪の小柄な少女。見間違いはない、映像盤で何十回、何百回と繰り返し見てきた天馬騎士団の少女たちがそこにいた。

それは、シルバーチケット、そしてゴールドチケットを手に入れたファンたちを相手にすべてのサービスを終えた頃だった。

「ふにゃあゝつ、シャワー気持ちよかつたあゝつ」

手コキやフェラチオ止まりだったシルバーチケットと違い、ゴールドチケットを手に入れた幸運なファンたち相手に、三人の美少女たちはがつつりと身体を張った特上サービスに励みまくった。

具体的には、ファンの望むことなら基本的にどんなことでも、ファンの体力の続く限り何度でも。限りなく貴重なチケットゆえ、人数こそ多くはなかったものの、それだけ熱烈なファンの欲望は凄まじく、少女たちのありとあらゆる穴には彼らの欲望がねじ込まれ、濃厚な白濁液が溢れるほどに注ぎ込まれた。

「ようやく匂いが取れた……あいつら耳の穴にまで流し込んでくるんだもの」

熱いシャワーと石鹸で全身を洗い流し、ミサカは自慢の黒髪を梳きながら匂いが残っていないかを確認する。

効率主義のミサカはファンの精液を絞り取るのも一番手際がよく———というか極めて事務的に容赦なく処理していたが、そんなミサカでもさすがに堪えたらしい。さっさと宿舎に戻って寝たいと言いだす友に微笑みかけたティファの目に、黄金のチケットが留まっ

た。

「これは……？」

使用済みのゴールドチケットはその場で破り捨てられる。裏を見ると、そこに所有者の名前が書き込まれている。

「まあ、まだサービスを受けていないお客さまがいたなんて」

「えーっ、まだやるの？ シャル疲れたよお」

「チケットを置いていったということは、サービスを受ける権利を放棄したということでしょう。そんなのほっときやいいわ」

「にべもないミサカとシャルに、ティファはかぶりを振った。

「いいえ——もしかしたらこの方は何か事情があつてサービスを受けられなかったのかもしれません。それに、これはわたくしたちの大事なお仕事なのよ」

すでに行く気満々の金髪のリーダーに、黒髪の少女は一瞬「なら一人で行って」と言いそうになり、その言葉を飲み込んだ。

一人で行けと言われれば、ティファは果たしてその通りにするだろう。

だがそれはミサカの——天馬騎士団の本義もとに悖る。何より彼女たちは三人揃つてこそ天馬騎士団、いやPGS3なのだから。

「シャル、もうひと仕事よ。で、リーダー。そのところは」

「決まっていますわ……『枕営業魂』にかけて！」

はあ、と小さなため息はティファの勇ましい鼻息にかき消された。

「何をしに来た……お前たちなど呼んでおらん」

突如老人の独居を訪れた三人の美少女たちに、老人は厳めしい目を向ける。

「ご挨拶ですね、ご老人。あなたが置いていったゴールドチケットにはしつかり住所氏名が記載されていました」

ミサカの言葉に老人は鼻でせせら笑う。

「お前たちの卑猥なサービスなど不要と思ったから捨てていったのだ。騎士ともあろう者が娼婦まがいのサービスなど……」

「ええーっ、だってみんないっぱい音響盤買ってくれたし、ふぁんの人に喜んでもらいたいんだものーっ」

「それに……少し誤解なさっておられるようですわ、オーベルシュタインさま。わたくしたちは決して、ファンの皆さまのお使いになった『お金』に叩頭こうとうしているわけではございません」

「ほう？」

あからさまに娼婦呼ばわりされたことをそよ風のように受け流し、ティファは薄衣の下

の成熟した肢体を見せつけるように腰をくねらせ、老人の傍らにひざまづく。

「だが、ワシが大枚をはたかねば、ゴールドチケットは手に入らなかつたし、お前たちがこうして訪問してくることもなかつたのではないか。つまるところは金目当てだろう」

「いえ——『愛』です」

きつぱりと言つてのける金髪の美少女に、老人は息を呑む。少女の瞳が一点の曇りもない清らかなものだったからだ。

「ま、実際のところ王宮から支払われる給金つきやもらつてねーし」

「わたくしたちの活動の売り上げが市民に還元されると言つたのはミサカでしょう。それに……」

と、しなだれかかってくるティファの甘い体臭に、老人は年甲斐もなく身を固くする。

「もちろんすべてのファンに同じサービスができるわけではありませんし、それは心苦しく思っています……わたくしたちは自ら望まないことを自分たちに強いているわけではありませんわ」

「な……そ、それはどういう……ッ？」

左右から近づいてきた少女たちの唇が、白髭に覆われた老人の萎びた頬に押しつけられる。マシユマロのように柔らかな少女たちの唇の感触に、数々の浮名を流してきた老人は息を呑む。

「き、貴様たちのような小娘の青臭い色香に、ワシが血迷うと思うか」

「青臭いかどうか——確かめてごらんあそばせ」

のすつと老人の腰に跨ってくるミサカが、胸元をはだける。

老人は少女のあまりの軽さと太ももの感触にぎくりとするが、ミサカは老人の手を取って自らの膨らみに当てさせる。

「ふ、ふん。そうまでして男に媚を売りたいか小娘」

「だからわかかってないっていうのさ、爺さま」

「な、なんだと……うお？」

節くれだち、枯れ木のような彼の手のひらの下で、少女の胸の突起が健けなげ気にしこつている。ほんの少し手を動かしただけで、ミサカは「ん……」とか細い声を漏らし、眉根をひそめてみせる。

さらに老人の肩に両手を置くと、切なげに腰をくねらせ、ガウンの上から股間を擦りつけてくる。

「だから言ったでしょう、私たち無理して嫌なことしてるわけじゃないって」

「そおだよ、あたしたちファンの人たちが喜んでくれると嬉しいもの。お歌やダンスを見てもらうのも楽しいけど、もっとみんなを喜ばせたいってみんなで相談して決めただよっ」

老人の頬にちゅっちゅとキスを浴びせながら、シャルロットは彼の二の腕にぐいぐいと巨乳を押しつけ、うっとりした顔で答える。

「そうです、それこそがわたしたちPGSSの愛なのですわ！」

ティファも巨乳を思いきりよくはだけると、老人の頭部をぎゅうと抱きしめる。クツシヨンのように柔らかな肉球に鼻と口を塞がれ、老人は呼吸困難にもがく。

「ふが、もが、わ、ワシを殺す気か！」

「あら、申し訳ございません。では改めて……」

と、赤子に授乳するような体勢で髭もじやの顔に乳房を押し当てる。並の男なら乙女の突起物にむしゃぶりつくところだが、老人は顔を赤らめつつもそっぽを向く。

「な、何が愛だ、馬鹿馬鹿しい……するとお前さんたちは見ず知らずの男たちに自分から進んで身を任せているというのか」

「見ず知らずの方たちではありませんわ」

「そおだよ、みくんなあたしたちのファンだから！ 仲間だから！」

彼の放蕩に満ちた人生の中で、わずかな金のために男に身体を売る商売女なら星の数ほど見てきた。金とは無関係に、ただ欲望のままに男を漁るあさ貴族の令嬢、年老いてなお若い男を待ちらせる醜い女貴族も知っている。

だが、これほどまっとうに愛を語り、人に歓びを与えることに恥じることはない少女た

ちがいただらうか。

「さあ爺さま、わかつたら観念して私たちのサービスを受けなさいな」

くいくいと股間を擦りつけてくるミサカの乳房から「すっ」と手を離すと、彼はゆつくりとうなだれる。

「いや……お前さんたちの心根こころねはよくわかつた。お前さんたちを娼婦だの金目的だと言つたことは謝る。だが……ワシはお前さんたちの『愛』を受け取るに値しない人間だ」

「……お爺ちゃん？」

「この屋敷を見ればわかるだろう。ワシはこの年になるまで自分が一番大事で、他人は皆ワシの地位や財産に群がるハイエナのようにしか見ていなかった。妻も、息子も娘も、孫たちでさえそんなワシを恐れ、拒絶し、離れていった。そうしてこの寒々しい屋敷で独り死んでいく、そんな人生がふさわしい男なのだ」

「オーベルシュタインさま……」

「うわあんつ、こんなおつきなお屋敷に一人ぼつちなの？ お爺ちゃんかわいいそうだよおつ」

老人の告白にシャルロットはたちまち大粒の涙を浮かべる。

「さあ、わかつたらう。ワシはお前さんたちの気持ちを受け取る資格など……」

「んなあゝゝにを突然語りだしちゃつてるかなあ、この爺じいつさまは！」



「ミ、ミサカ？」

スレンダーな裸身を覆っていた薄布を「びりびりびり」と引き破るや、黒髪ポニテの美少女はむんずと老人の股間をガウンの上から引つつかんだ。

「うぬおおっ？」

「ここから超VIPマル秘エロエロタ〜イムなんだよ、爺ちゃん！ 寝ぼけたこと言ってる暇があったら、ここをさっさとおっ立てればいいんじゃないかな？ かな？」

「ひええええ、ミサカちゃんが壊れちゃった……」

全裸で仁王立ちになり、老人の股間を揉みしだく黒髪の才媛に、ティファも目を丸くしている。だがすぐに、ミサカは別に怒っているわけではないということに気付くと、美しい金髪をかき上げ、老人の頭を再び胸にかき抱く。

「ミサカの言う通りですわ、オーベルシユタインさま。この世に愛を受け取る資格のない人など一人もおりません」

「そおだよつ、シャルたちがお爺ちゃんをいっぱい愛してあげるからねっ」

俄然やる気になった三人の美少女たちに、老人はどうすることもできない。

「こ、こらワシは」

「ああ〜ん？ 上のお口と違って下はずいぶん正直ですよ、お爺さま〜？」

「ミサカちゃん、げひん……あつ、でもお爺ちゃんのちんちんおつきくなってきたよ！」

老いたりとはいえ、これだけの美少女に囲まれ彼のイチモツはミサカの手の下でむくむくと膨張し始めていた。れろりと舌なめずりをすると、ミサカはガウンを手早くはだけ、老人の茎を露出してしまふ。

「ひねくれ爺さんに喰らえ、この愛！ 必殺、ミサカローリングバキュームツツ」  
「ぬっ、ぬおおおおお〜〜〜っつ」

半勃起状態のペニスをはつくりと啜えるや、ミサカは頬をすぼめて老人の茎を吸引する。ただ吸引するのではない、猛烈な勢いで舌を回転させ、亀頭の周辺ぐるりと舌先でくすぐり、裏筋の最も敏感な部分をねぶり上げる。

その三つの動作をほぼ断続時間なしで行う、まさに必殺のフェラテク。

「ふうっ。まずまずいいもの持つてるじゃない、爺さん」

「おおお……愚息がこんなに活力を取り戻したのは、何年振りだろう……」

「ふふふ、わたくしのお乳も可愛がって下さいませんか」

ティファが乳首を口に近づけると、老人は桃色の突起物を口に含み、ちゅばちゅばとい、転がし始める。それを見ていたシャルロットも、負けじと老人の手を自らの股間に導き、乙女の花弁を弄らせる。

「くふうんっ、お爺ちゃんの指、ごつごつしてて気持ちいい……っ」

「ああ、その舌使いとても気持ちいいですわ。あん、お尻に手が」



「くっくく、無様な娘。魔物の王のチンカスはそんなにうまいか」

「は、はひい……どうか、両腕も解放して下さいませ。魔王さまのおちんぼ、わたくしのお乳で愛させて下さいませ」

両腕を縛り上げていた触手の力が緩むと、ティファは露出した巨乳と両腕で魔王の巨大なる茎を抱きしめるように乳の谷間に挟み込む。

よりあわさった鋼鉄のような裏筋を乳で擦り上げつつ、両手のひらに巨大な睾丸の入った玉袋を受け止めて優しく愛撫する。潤滑油代わりに涎を乳の谷間にとろりと落とすと、谷間からよつきり突き出た先端にちゅっちゅとキスを浴びせる。

「はあ、はあ……わたくし、M A K U R A 魂にかけて魔王さまのおちんぼにご奉仕いたします。ですから、わたくしのささやかなお願いを聞き届けて頂きますか……?」

「M A K U R A とはなんのことだ？ ふうむ、よくわからぬがお前が我を満足させられるなら、考えてやってもいいぞ」

魔王の言葉に金髪の美少女はとろけるような従順の笑みを浮かべ、そそり立つ巨根に鼻を近づけて牡の匂いを胸いっばいに吸い込む。

「ああ……魔王さまのおちんぼから刺激的な匂いが立ち上って……この匂いだけでイッてしまいそうですわ」

「きむすめ生娘とは思えぬ淫乱な口ぶり、そのドスケベぶりに報いてやらねばいかな」

邪悪な笑みを浮かべて指をパチンと鳴らすと、ティファの股間を撫で上げる触手の動きが変わった。ぐるり鎌首をもたげると、粘液に濡れた先端が花卉の後ろにある秘門をぐりぐりとえぐり始めたのだ。

「ふああっ？ そ、そこは、あ、ああんっ」

「どうした、お前の処女穴は無事を保っているぞ？ 処女を保ったまま尻穴を犯されると  
いう恥辱を味わうがいい」

「ああ、あんっ。お、お尻に、は、入って……くあああんっ」

みちみち……ずぶずぶ、ずにゆううつっ。

陰茎ほどではないが十分な太さを持った触手が、ティファのアヌスに押し入ってくる。

括約筋を強引にこじ開け、粘液を潤滑油にしてむりむりと美少女の直腸に押し入り、腸粘膜を内側から押し広げる。ごりごりと肛門肉を擦られる感覚に、金髪少女は目を見開いて背徳的な感覚に悶える。

「ふああああっ、お尻らめえ……ああッ、そんな奥までええっ」

尻穴を犯されるのは初めてではない。ファンサーピスの過程で幾度となく尻穴にペニスをねじ込まれる快感を味わってはきたが、直腸内でうねうねと蠢く触手の感覚はまたひと味違う。

だが魔王はティファの反応を初めて尻を犯される処女の反応と受け止めたのか、さらに

邪悪な笑みを浮かべると、がすがすと腰を振るって美少女の口を犯す。

「そらそら、口がお留守だぞ娘！ おお、なんという張りのある乳房だ……そうら、もつと舌を使って我がマラに奉仕するのだ」

「んぶ、んぐうう……んはあんっ、魔王さまのおちんぽおいひんっ。魔王さまのザーメン飲ませてくらしいッ」

尻穴を触手に犯されながら、ティファはアへ顔で魔王の肉茎を乳と舌で擦り立てる。先走り汁が体温で温められて強烈な臭気を発し、金髪美少女の顔は魔王の体液でべとべとに汚されている。

その辱めさえもティファにとっては興奮の材料でしかない。手のひらに収まりきらないほどの魔王の睾丸を揉み、そこに蓄えられた子種汁を欲し、少女は頬をすぼめて魔茎を吸引し、その精をおねだりする。

「う、うむううっ。なんという貪欲な吸いつき……！ むおおっ、し、絞り取られるっ」「んぶううっ、んむううううううっ」

どくっ、どくんっ。びゆるるっ、びゅっ、どびゅうううううっ。

鈴口がぱっくりと開くと同時に、魔王の茎がぶわりと膨れ上がる。

根元からどくどくと噴き上がるそれはポンプのような勢いで白濁粘液を迸らせる。粘っこい塊が連続的に少女の口の中に撃ち込まれ、気道と食道を塞ぎ、ティファの呼吸が一瞬

止まる。

(ああ……なんて濃厚なおちんぽのお汁……!)

ティファは懸命に喉を開き、撃ち込まれた体液を胃の腑に送り込む。

だが放出は一向に止まることなく、飲み下す勢いを上回った白濁に少女はむせ返り、口と鼻孔からどろりと濃厚な粘液を噴きこぼしてしまった。

「ぐふっ、ごほ、かは……っ」

咳き込む美少女の金髪になお降り注ぐ白濁。魔王は少女の金髪を掴み上げ、その美貌に向けてどばどばと粘っこい体液をなすりつける。

「どうしたどうした、我がマラへの奉仕はそれで終わりか」

「い、え……わたくし、は、げほっ」

糊のような粘液に片目を塞がれ、それでも懸命に口を開けて魔物の体液を飲み下そうとする美少女の姿に、魔王の茎はみりりとそそり立つ。

「たかが人間の小娘が、そそるではないか……お前のような淫乱な娘はただ殺すのは惜しい。死ぬまで肉奴隷として飼ってやろう、我が子種で孕むがよい」

「はあ、はあ……ああっ？」

ティファの両腕と両足に触手が絡みつき、持ち上げられる。

M字に開脚された美少女の尻穴には触手がねじ込まれたまま、下着を剥ぎ取られた花卉

が丸出しになってしまい、両腕まで拘束されてはもはやなす術もない。

「ああつ、こんな無体な……な、何をなさるのですか。わたくしの乙女の証だけは守って下さるはずでは」

「ふははは、魔物が人間との約束を守るとでも思っていたのか？ 我がマラにてお前の純潔を引き裂き、子種汁を注ぎ込んでくれよう」

「あゝ〜れ〜〜つ」

己の卑劣さに魔王は胸を張って勝ち誇り、金髪の美少女は哀れ魔王の奸智に打ちひしがれ——否、打ちひしがれる己の演技に酔いしれる。

悲嘆の涙に泣き濡れる美少女の股を無慈悲にもぐいと押し広げると、魔王は巨大なる肉棒をティファの可憐な花卉にあてがい、下腹部を突き出して一気に根元近くまで乙女の中心を貫いた。

「ああああつ、ふ、太いですわああ〜〜つ」

「ぐっふふふ、さすがに初ものは窮屈だな。あまり窮屈すぎて処女膜の感触もよくわからぬほどだ……どうだ、前後の処女を一度に失った屈辱は？」

「ああんつ、魔王さまのでかちんぽ、おま○この奥まで届いてるッ、素敵ですわあつ」

肉の凶器の先端で子宮を激しく突き上げられ、ティファは性液まみれの金髪を振り乱して悶え狂う。



みっちりと押し込まれた肉茎の後ろでは、触手が身をのたうたせて少女の直腸をぐりんと内側からえぐり擦る。前後からの凄まじい衝撃にティファは半開きの口から舌を突き出し、内腿を緊張させて魔王の竿を締めつける。

「ぬうう、生娘の分際でなんとという淫らな食いつき！ それほどに私のマラから子種を絞り取りたいか、淫乱娘が！」

「ああ欲しいッ、魔王さまのちんぼ汁でわたくしの子宮を満たして下さいませええッ」

はあはあと発情した牝犬のごとくに舌を突き出すと、魔王が分厚い唇をかぶせてくる。

野性的な牡の匂いにうっとりしながら舌を絡め、唾液をじゅると啜り上げると、ティファは魔王の首にしがみつきながら膣を締め、自ら腰を振って魔茎をより深く啜え込もうとする。

「ぬふうう、肉がうねって絡みつくようだ……これほど具合のいいメス穴は初めてだ！我がこれほど追いつめられようとは、恐るべき淫乱よ……望み通り、我の子種で孕むがよい、人間の小娘！」

「はいっ、魔王さまのお情けを子宮いっぱいにくださいませええッ」

膣穴を突き破らんばかりの猛烈なピストンに、ティファの腹部が内側から突き上げられる。だがティファは内臓をかき回す衝撃に金髪を振り乱し、口の端から涎を垂れ流してよがり狂う。

「あひいいい、魔王ちゃんぼしゅごいですわああ。おま〇こ壊れてしまますうう」

「ぬうつ、さらに締めつけが……ッ。くつ、だ、出すおおつ」

「ひいいい………つっつ」

びゅばあああつつ、どく、どくんつ、びゆるびゆるる………つつ。

子宮を揺るがすような衝撃と共に、ティファの中の魔茎が跳ね上がる。

射精というよりも放出、いや砲撃のごとき粘液の塊がどすんどすんと少女の子宮に激突し、それは一瞬で子宮を満たし、なおも注ぎ込まれる。

「ふあああつつ、熱いイイツ、熱いのでお腹満たされますううつ」

がくがくと痙攣する手足に絡みついていた触手が、あまりの反動で振りほどかれる。ティファは両手両足を魔王の身体に絡みつかせ、なお続く射精の衝撃をしなやかな膣と子宮ですべて受け止める。

放出は恐ろしく長く続き、行き場を失った白濁液は少女の花弁からどぼどぼと逆流して石床に滴り落ちていった。

「はあ、はあ、はあ……我ともあろうものが、人の小娘のメス穴にこうも夢中になってしまうとは。さすがに我がマラの勢いも持続せぬわ」

「ええ……つ、次はあたしの番なの………つ」

「な、なんだと!？」

金髪の美少女同様、触手に搦め捕られ無残に陵辱されていたはずの茶髪の少女が、いつの間にか魔王の背後に佇んでいた。

触手にはぎ取られたのか乳房や尻がむき出しになった半裸状態だが、特にダメージを受けたという様子もなく、それどころか大胆にも魔王の股間に手を潜り込ませ、萎えかけた陰茎に指を絡めてくる。

「ティファちゃんの中にいっぱい出して元気がなくなってるねえ。シャルがすぐに元気にしてあげるからねっ」

「な、なにを……ぬふああんっ」

小柄な少女の手が尻の割れ目の奥をもぞもぞとまさぐると、少女の指は魔王の裏門を探り当て、ずぶりと指をねじり込んできた。

「ぬほおおおっ？ 小娘の分際で、魔王の尻穴を襲うとは……あはあんっ」

「ぬっふっふっ、男の人もここ弱いんだよね、シャル知ってるんだから、そりゃあっ」

「なっ、中で指を曲げるでないっ、あひいっ」

直腸のある部分を少女の指が探り当てると、萎えかけていた巨根はみるみる力を取り戻していく。

思いもかけない少女からの反撃に目を白黒させていると、今度は黒髪ポニーテールの少女が右腕にしがみついて、魔王を床に押し倒そうとしてくる。こちらの少女も半裸状態だ

が、黒い瞳をらんらんと輝かせ、頬が上気している。

「無事復活したということで、今度は私たちの相手も頼みますよ、魔王殿」

仰向けに押し倒された魔王の顔の真上で、ミサカは悩ましげに腰をくねらせ、指で股間の花びらをくばあと広げてみせる。

ぬらぬらと蜜壺を満たす体液は触手の粘液か、それとも少女自身が分泌した愛液のぬめりか。いずれにせよ、触手に絡まれ一方的に陵辱されていた無力な乙女の姿とは思えない光景に、魔王は混乱する。

「貴様ら、何がいったい……しょ、触手どもはどうしたのだ」

はっとミサカたちが襲われていた方に目をやると、そこには氷結し粉々に砕かれた触手の残骸と、雷撃を浴びて焼け焦げた触手のなれの果て。

「ティファばかり相手にしているものだから、こっちも飽きてきたのよ。そのぶつといモノで今度は私たちが楽しませてもらうわよ」

「ひっ、ひい!!」

舌なめずりをする黒髪の少女の異様な迫力に、魔王は情けない声を上げる。

身を起こしかけるところを小柄なロリ少女が力任せに肩を押さえつけると、魔王の巨体はびくとも動けなくなってしまう。

「駄目だよお、おとなしくしてないと。シャルとミサカちゃんのおま○こにもいっぱいど

びゅどびゅでもらわれないといけないんだから〜」

少女とも思えぬ怪力に魔王の顔に恐怖の色が浮かぶ。

触手に搦め捕られ、なす術もなく辱めを受けていた姿はどうやら偽りだったということに、彼はようやく気が付き始めていた。彼以外の魔王軍を少女たちが撃破したのは、夢でも幻でもなかったようだ。

「だ、だが我は魔界最強の存在！ こ、このような小娘に……ッ」

「まあ、心配しなくてもあんたを滅ぼしたりはしない。そんなことしたら、またぞろ別の魔物が魔王を名乗って、性懲りもなく私たちの世界に攻め込んでくるのは目に見えてるからね」

魔王の腰に跨り、愛おしそうに巨根をしごくミサカの言葉に、魔王はされるがまま。

ひんやりとした少女の手のひらの感触は心地よく、魔王の精液のぬめりでにちゃにちゃといやらしい音が響く。

「これが魔王の男根……楽しませてくれそうね、ふっふっふっ」

「ミサカちゃん、悪者っぽくて怖い……」

「や、やめろ……何をする気だ……う、うわああああっ」

天を仰ぐ巨根をしごきながら、ミサカはゆっくりと腰をくねらせて魔王の茎を飲み込んでいく。そのしなやかさ、窮屈さはティファのそれとは微妙に異なり、うぞうぞと肉壁が

魔王の茎を包み込む。

「ぬほおおお、これはまたなんともいい膣圧ッッ」

ミサカの膣内の感触に思わず頬を緩めると、その顔に小さなお尻がぼすんと乗っかってくる。下着はつけておらず、果物のように甘酸っぱい乙女の蜜が魔王の顔面になすりつけられる。

「んふうん、シャルのお股もぺろぺろしてえ〜っ」

「ふが、もが」

鼻と口を塞がれもがく魔王の舌の動きに悶えるシャルを、ミサカは抱き寄せ胸の膨らみに顔を寄せる。

「ふふ、シャルロットは堪え性がないな。私がシャルのおっぱいも愛撫してやろう」

「ああん、ミサカちゃんの舌がシャルのおっぱいちゅっちゅしてらう〜っ」

「まあまあ、二人がかりで魔王さんから絞り取ろうだなんて、二人のエッチな姿を見ていると、わたくしもまたムラムラしてきましたわ〜っ」

騎上位および顔面騎乗で悶えよがるミサカとシャルを見ながら、金髪の美少女は再び触手と絡みあい悶え始める。

尻穴を触手に犯されながら花卉を指でかき回すと、たっぷりと注がれた魔王の白濁がぴちやぴちやと噴きこぼれ、ティファは淫らに身をくねらせて悶えよがる。だがそれは触手



に陵辱されているというよりは、触手に奉仕させ、肉欲に溺れている姿。

「ふがもがっつ！ お、お前たちはいったい……ひいい、し、絞り取られるっつ」

四方から押し寄せる乙女の甘い体臭と巧みな愛撫、自慰に耽る金髪の美少女の痴態とミサカの窮屈な膺の刺激。

しかも彼女たちは快樂に我を忘れているわけではない。

自らの意志で魔王に痴態を晒し、この状況に興奮し、より強烈な快感を得ようと魔王を逆レイプしているのだ。いかに強大な魔物の王といえど、この刺激にそう長く耐えられようはずもない。

「だ、駄目だあああつ、で、出るううううっ！」

どびゆるるるっ、びゆるっ、びゅばあああつ。

下腹部を揺るがすほどの大量射精に、黒髪の少女はふるふるすとスレンダーな肢体を打ち震わせて軽いアクメに達する。

「あら、もうフィニッシュですか？ 魔王ともあろうお方が情けないですね、持続力のなさは回数で補ってもらいますよ」

「えっつ、シャルの番までちゃんとおちんちん元気でいてくれないと駄目なんだよっつ」  
「あの、できればわたくしももう二、三回くらいはして頂きたいのですけれど……」

三人の美少女騎士たちがどこまでも本気だということを悟ると、魔王は——すべてのの



魔物の頂点に立った最強のモンスターは絶望の悲鳴を上げた。

「まあ待てシャルロット。ここは我らがリーダーに満足してもらおうじゃないか。それに、魔王殿はシャルの大きくて愛らしいおっぱいに興味津々のご様子」

「えっ、そおなの?」

オナニーによって再び火の点いた身体を持て余していたティファは、親友のウインクにいち早く気付いた。たつぷりと魔王の体液を注ぎ込まれた膺は快感の余韻に浸っているが、触手にだけじつくりと馴染られた後ろの穴が切なくて頭がどうにかなりそうだ。

「そ、そうですわシャル。魔王さんのおちんぼはあなたにはまだ少し大きすぎるから、指でじつくりほぐして頂いた方がよくてよ」

「私のよりも数段でかいその憎らしい乳を愛撫されながらな」

「ミ、ミサカちゃんがかわひ……じゃあ、ティファちゃんに譲るよ」

完全に魔王の意志は無視され、仰向けに押し倒された魔王の左右からミサカとシャルががっちりとその巨体をホールドする。

「ひえ?」

華奢な見た目よりもずっと力持ちのシャルに押さえつけられ、身動きできない魔王の二の腕に、四つの乳房が擦りつけられる。その手を股間にあてがわれると、ねだられるままに魔王は少女たちの蜜壺を弄らないわけにはいかない。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一ーホランス&ロマンティック満載!!!



## 二次元 DREAM MAGAZINE DREAM MAGAZINE



魔法、催眠、性転換：不思議Hコミック誌!

KTCは唯一のロマンティック



# MEGAMI CRISIS メガミ クラシス

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!  
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



## 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。